



桜井孝身の絵の世界 ●深野 治

6

この第二期の桜井の絵は、かぐわしいまでに美しい。しかし、その美しさは、装飾的あるいは耽美的なそれではない。装飾美が小市民的生活の安逸への奉仕だとするなら(多くの市場的な絵画がそうであるけれど) 桜井の絵は、それを明確に拒否したいところに成立している。それがあるいは、桜井の絵をいまなお多くの無理解のうちに押し込めている一般的な理由といえるかもしれない。

桜井は、だが、思想的スローガンとして絵を描くのではない。人間とは何か、の問いに全身を賭けて挑んでいるのだ。再びゴーギャンの画題を借りるなら「われわれはどこから来たのか、われわれは何者か、われわれはどこへ行くのか」を、絵でもって開示しようとするきびしい追求の世界である。

はなやぎにみちた滞米時代の作品に、さらに転機が訪れるのは、一九七四年のフランスへの旅立ちの前後からである。黄、青、緑などあざやかな彩りに満ちた画面が、しだいに黒と赤を主調とする表現へ展開していく。それに応じて、画面には、それこそ無数の人間群像が登場してくる。何十人、何百人という数だ。多くは、バンザイをしているように両手をあげ、その周囲には日本の仏教絵画の瑞雲を思わせるような浮雲が宗達ふうのタッチで描き込まれている。表現はきわめてシンプルに還元されている。単純な黒線で縁どられ 人物たちは、あるいはマルにチョコボ点の乳房を持っている。あるいは、子供の絵のような瞳を持っている。その体や顔

は赤い。そして周囲は光沢のある黒色に塗り込められている。ときには矢印や数字が現われてくる。

この世界は、画家桜井孝身が、サンフランシスコ時代から、さらに深く人間観想の中に踏み入り、個から社会へ、個我から全我へ進んでいった所産である。